

『メノン』『ゴルギアス』冒頭の発言の比較

松 井 貴 英

序

プラトンの対話篇は、一般に、師ソクラテスの哲学的問答法を真似るように執筆された初期対話篇、イデア論等のプラトン独自の哲学が書かれている中期対話篇、晩年のプラトンの円熟した哲学が示される後期対話篇に分類される。その中で、『メノン』と『ゴルギアス』は、初期と中期の間の、いわばプラトンの哲学の発展における過渡期に連続して執筆されたと一般的に解される¹。両対話篇は、それぞれに固有の特徴を幾つか持っているともいえる。『メノン』は短編であり、『パイドン』等の中期対話篇に繋がりうる内容（想起説や仮設の前提に基づいた探求等）を含む対話篇であり、ソクラテスが問い手の役割を主に果たすという初期対話篇における手法と同様の展開となっている対話篇であるといえる。他方、『ゴルギアス』は長編であり、特に後半においては、ソクラテスが語り手となり自身の哲学（もちろん、書き手のプラトンの哲学ということになるのだが）を語るという中期対話篇における手法に繋がりうる展開となっていると解することもできるように思われる対話篇であるといえる。

本論考では、このような特徴を持つ両対話篇の冒頭の発言が、両対話篇の対話の展開や、それぞれの冒頭の発言を行った対話相手の哲学的問答への適性を

¹ 『メノン』と『ゴルギアス』の執筆の順序に関しては、多くの解釈者たちによって、検討されているが（例えば、Scott, 2006, pp.194-208）、今回は、その点に関する検討は行わない。

顕著に表していることを示していく²。この問題を考察することは、ソクラテスの哲学的問答法からプラトン自身の哲学探求とその方法の確立へと繋がる、プラトンの哲学探求の方法に関する研究の端緒となるものであるといえよう。

1・『メノン』冒頭の発言³

『メノン』における対話は、「私に言うことができますか (echeis moi eipein)、ソクラテス、徳は教えられうるものでしょうか？ あるいは、教えられうるものでなく、訓練により身につくものなののでしょうか？ あるいは、訓練によって身につくものでもなく、学ばれうるものでもなく、そうではなくて人間にとって元々具わっている本性的なものであるのでしょうか、あるいはそれ以外の何かであるのでしょうか？」(70a1-4) というメノンの発言で開始される。このメノンによる問いには、それ以外のプラトンの対話篇において見られる場面の描写や本題に入る前の対話のような導入が示されていないがゆえ、唐突な印象を読者に与える。とはいえ、この唐突な問いによってこの対話篇が開始されているのは、プラトンの何らかの意図によると解することは、妥当なことであるようにも思われる。推測の域を脱しないが、プラトンは『メノン』において、他の多くの対話篇のように、冒頭に何らかの導入を書くことも可能だったであろう。例えば、Scott⁴が指摘しているように、冒頭の唐突なメノンの問いの後、メノンに関する情報（テッタリア出身であることや、ゴルギアスの教えを受け

² プラトンの対話篇の冒頭に関する解釈の基本的なスタンス（対話篇の冒頭は、対話篇において議論されるテーマや内容を暗示してはいるけれども、それらの全てが暗示されているわけではなく、読者は対話篇を読み進めていき、テーマや内容を理解した後に冒頭の発言をふり返る時、プラトンの意図を、そしてその対話篇における哲学探求の主題や道筋が暗示されていることに気づくと共に、より深く考えるきっかけを与えられる）は、松井（2012）における解釈と同様である。

³ 本論考における『メノン』に関する議論は、松井（2012）を補足したものとなる。

⁴ Scott, p. 12

たことがあること等)が述べられるが(70a5-c2)、そこで書かれているような情報を、冒頭に持って行くことが特に不可能だったわけではないだろう。少なくとも、決して書くことができなかったわけではないと考えることは、他の対話篇の冒頭を見れば、妥当であるといえよう。それにも拘らず、『メノン』冒頭は、先に示したようなメノンの発言によって開始されているのである。

2・『ゴルギアス』冒頭の発言

『ゴルギアス』における対話は、「論争や争いについて (polemou kai maches)、ソクラテス、そのような仕方に参加しなければならないと、人々は言っています。」(447a1-2)⁵というカリクレスの発言で開始される。『ゴルギアス』においては、他の多くの対話篇と同様、冒頭において、本題に入る前の導入が展開されている。このカリクレスの発言は、ゴルギアスが非常に素晴らしい弁論を行ったが、既にそれは終了した——という内容の、導入部分の冒頭の発言である。

カリクレスは、『ゴルギアス』において、ソクラテスとの対話相手の三人目として登場する。プラトンが『ゴルギアス』の執筆を開始した当初からカリクレスを三人目の(あるいはこの対話篇における最後の、そして三人の中で最も長く対話が展開されるという)ソクラテスとの対話相手として想定していたかどうかを検証することは困難であるが、おそらくソクラテスとの対話相手として登場させることを想定した上で、プラトンは、対話篇の冒頭で、カリクレスにこのような発言をさせたとも考えられるべきだろう。Burnyeat⁶も指摘しているが、冒頭の polemou kai maches が、まさにこの対話篇において展開されるものであることに読者はすぐに気づくだろう。『ゴルギアス』で展開される対話は

⁵ ここでは、多少の修正をしているが、本論考における『ゴルギアス』の日本語訳に関しては、特に言及のないものについては、基本的に、加来訳を参照している。

⁶ Burnyeat, pp. 11-12

プラトンの対話篇の中で最も手に負えない論争であり、さらには、対話篇の後半、カリクレスが登場するに至ると、議論のテーマがカリクレスの主張（これを端的に表しているのは、「自然そのものが直接明らかにしているのは、優秀な者は劣っている者よりも、また有能な者は無能な者よりも、多く持つのが正しいことである」(483c8-d2) という発言であろう) に関わるものであること、そしてそれをソクラテスは、到底受け入れることができないこと、ソクラテスとカリクレスの間の議論は建設的なものではなく論争的なものであること等に気づくのである。この Burnyeat の指摘は妥当なものであろう。

この対話篇冒頭のカリクレスの発言の最初の *polemou kai maches* を読むことで、『ゴルギアス』におけるソクラテスと対話相手の問答が論争的なものとなっていくことに気づく読者は、少なくはないだろう。さらには、『メノン』と『ゴルギアス』の冒頭の発言の違いに、プラトンの何らかの意図に気づく読者も、両対話篇を読んだことがあるならば、もしかしたら、少なくはないかもしれない。

3・冒頭の発言の違いをどう解すべきか

『メノン』と『ゴルギアス』という、初期と中期の過渡期に前後して執筆されたとされる両対話篇の冒頭での、それぞれの対話篇における登場人物の中でソクラテスと最も多く対話を行っているメノンとカリクレスによる、それぞれの発言の違いを、どのように解釈すべきだろうか。初期から中期への過渡期であり、第一次シケリア行きの頃であるこの時期に執筆された両対話篇に、プラトンの哲学における何らかの変化を読み取ることができると考えることは不思議ではないだろうし、実際、何らかの変化が生じたがゆえに、プラトンは中期対話篇において、イデア論を提示する等、独自の哲学を書き表していくことになっていったのであろう。そうであるとすれば、その何らかの変化の暗示のようなものを、それぞれの対話篇の冒頭から読み取ろうとする試みも、意味のあ

ることであるといえるかもしれない。そこで、これ以降で、両者の発言を解釈した上で、対比していくことにする。

3-1・『メノン』

『メノン』冒頭の、メノンによるソクラテスへの問いの最初の言葉、「私に言うことができますか (echeis moi eipein)、ソクラテス」(70a1)を適切に解するには、三つの点に留意する必要がある。一点目は、「言うことができますか」(echeis……eipein)であり、二点目は、「私に」(moi)であり、三点目は、メノンによる問いであるという点である。一点目は、「(徳は教えられうるものであるかどうか)言うことができるかどうか」に関わる問いであり、説明の可能性を問うものであると解されうる。そしてこのことが、哲学的探求の方法において、重要な役割を果たしているとプラトンが考えていたと解することも、可能であるといえるかもしれない⁷。二点目は、冒頭の問いが、ソクラテスへの、対話の相手である自分へ向けての「徳は教えられうるものであるかどうか」の説明を依頼するための問いであることを示すためのものであると解されうる。三点目は、メノンがソクラテスに対して、単なる意見表明をしているわけではなく、質問しているという点により、メノンがソクラテスとの哲学的な問答に、それについて行けるだけの能力があるかどうかは別に⁸、この対話篇を通じて、ついて行くという展開を暗示していると解することもできよう。

この箇所に関して、Bluck は、唐突な対話篇の開始は、プラトンを長いこと悩ませていた問題である、ソクラテスが存在することを信じていた絶対的な倫理的基準があることを主張するための可能な答えをプラトンが見つけたからであり、それは想起説であると解している⁹。たしかに、そのような答えをプラトンが見つけたことが、この対話篇の執筆に関わっていると、あるいは(大き

⁷ 松井 (2012)、34-36頁

⁸ メノンの哲学的な探求の能力に関して、多くの解釈者により検討されてきているが、本論考においては行わない。この問題に関しては、松井 (2005 (a)) 参照。

な) 動機のひとつであると解することは、妥当であるといえよう。この Bluck の解釈は、想起の実演により奴隷の少年が正解に辿り着いた後のソクラテスの発言「そして今やこの少年にとって、これら色々な思いなしは、まさに夢のように引き起こされたが、しかし、もし同じ事柄について、何度もいろんな方法で誰かが尋ねるなら、遂にはそれについて誰にも負けないくらい正確な知識を持つようになるだろうということを、あなたは知るだろう。」(85c9-d1)や、「それは誰かが教えたからではなく、訊ねたことで知るようになるのでしょうか、彼自身の中から知識を取り出すことによって?」(85d3-4)におけるソクラテスの発言を考慮しつつ、探求を行う者に対する問いと、それに対する返答の終わることのない(ように思われる)繰り返しという哲学的問答法によって探求の対象を発見することが想起であることを踏まえるならば、妥当であると解することができよう¹⁰。というのも、ここで示されている想起に関するソクラテスの発言は、「何度もいろんな方法で誰かが尋ねる」や「訊ねたことで知るようになる」において顕著であるが、誰かと探求者がお互いに尋ね合うことで、探求者が知識を獲得するに至ることが述べられているのであり、そのような「尋ね合い」は、哲学的な問答であるか、あるいは方針においてそれと同じものであると解することも可能であろうからである。

3-2・『ゴルギアス』

『ゴルギアス』冒頭のカリクレスの発言、「論争や争いについて (polemou kai maches)、ソクラテス、そのような仕方に参加しなければならないと、人々は言っています。」(447a1-2) に関しても、次の三点に留意する必要があるだろ

⁹ Bluck (p.199) の他に、メノンのこの冒頭の発言を、『メノン』全体に関わる問題として捉えている解釈者に Scott (2006) がいるが、Klein (1965), Sharples (1985) は、そのようには捉えてはいない。

¹⁰ ここで言及した『メノン』の該当箇所に関する詳細な検討は、松井 (2005 (b))、93-105 頁を参照せよ。

う。一点目は、polemou kai maches と、「論争や争いについて……」と述べられている点である（この点に関しては、先に述べたので、詳細についてここでは言及しない）。二点目は、「人々は言っています」（phasi）と述べられている点である。三点目は、疑問文ではないという点である。この発言における phasi の特定の主語は、ここでは示されていない。それゆえ、二点目と三点目は、カリクレスが、この発言を、誰か特定の人ではないが、世間の人々が話しているというかたちで発言していると解することもできよう。そのような解釈が妥当であるなら、ここでのカリクレスの発言は、『メノン』冒頭のメノンのように自分が抱いている疑問をソクラテスに尋ねるための発言ではないと解されうるようにも思われる。

3－3・二つの発言の相違

メノンとカリクレスの発言における顕著な相違は、メノンはソクラテスに質問をしているが、カリクレスは質問ではなく、単にソクラテスに話しかけているのみであるという点であろう。すなわち、メノンは、『メノン』冒頭でソクラテスに自分の抱いている質問をすることで、ソクラテスとの間で一対一の対話を行おうとしているのに対し、カリクレスは、『ゴルギアス』冒頭において、単に発言をしてはいるものの、メノンのように一対一の対話を行おうとはしていない点が、異なっているのである。この相違は、それぞれの対話篇における両者のソクラテスとの対話に臨む姿勢の違いに関わってくるように思われる。

メノンは、『メノン』全体において、常にソクラテスとの哲学的問答に、高いレベルでついて行けているわけではないし、知的怠惰な性格であると解されることもある¹¹が、それでも、ソクラテスとの哲学的問答の中で（決して常に誠実に行っているというわけではないかもしれないが）メノンがソクラテスの方法の範疇内で対話を行っているとは解することは、無理筋ではないように思わ

¹¹ Bluck, p. 125

れる¹²。

それに対して、カリクレスは、『ゴルギアス』において、ソクラテスとの哲学的問答を行おうという態度を示していないようにも思われる¹³。特に、506e-507aにおけるソクラテスによる哲学的問答の方法の説明の後、ゴルギアスがソクラテスに対して議論を最後まで続けるよう促すが(506a8-b3)、その直後に、カリクレスはソクラテスに対して「まあいいから、あなた、自分で話して、片をつけてくれたまえ。」(506c4)と発言する箇所は、カリクレスがソクラテスによる哲学的な問答の方法に基づいた対話を、それを行うことができるかどうかの判断は脇へ置くとしても、少なくとも行う気がないことを示していると解しうる根拠となるように思われる。そして、もしかしたら、そのようなカリクレスの態度を察知したがゆえに、ソクラテスは、カリクレスとの対話において、哲学的な問答法ではなく、論駁的な対話¹⁴を行ったと解することもできるかもしれない。

このような、メノンとカリクレスの、ソクラテスとの哲学的問答に対する参加の態度やソクラテスへの接し方の相違は、既にそれぞれの対話篇における冒頭の発言において、プラトンにより、暗示されていたと解することも可能であるといえよう。それは、Vlastos が「想像しなさい」と述べているような、ソクラテスの対話篇を多く執筆していた若きプラトンが、彼の執筆するソクラテスは決して心をかき乱すことがないが自身は心をかき乱し続けた「いかにして

¹² 本論考では、この点に関する詳細な検討は行わない。詳細については、松井(2005(a))を参照。

¹³ 全てを挙げるとキリがないので、一例を挙げると、「しかし、どうしてあなたは自分で言おうとしないのかね、ソクラテス」(504c)、「それは、あなたが自分で決めたらいいだろう」「しかし、あなたが自分ひとりでこの議論を最後までしてしまうことはできないものだろうか? あなたの方だけで話すなり、あるいは、答えがあるなら、あなたが自分で自分に答えるなりして」(505c-d)、「まあいいから、あなた、自分で話して片をつけてくれたまえ」(506c)、「議論に勝ちたい一心なのだね、ソクラテス」(515b)、「なんなら、あなたに同意しましょうか?」(516c)等が、挙げられる。

¹⁴ この方法に関しては、Vlastos, Socratic Elenchus を参照せよ。

これは真でありうるか？」という問いに対する、そしてソクラテスの論駁法に内在する問題のひとつの答えである、想起説という形而上学的飛躍であり超思弁的理論¹⁵——に到達するためのプラトン自身における心のかき乱しの軌跡の最後の部分であり、最終的に、心をかき乱し続けた末に到達した自身の哲学を述べるようになる、その瞬間を示していると解することも可能であるかもしれない。(尤も、Vlastos の想像と同様に、この考察も、想像の枠内にあるのみであるのかもしれないし、このような解釈が妥当であるかどうかは、今後、検討していかなければならない問題であるのだが。)

まとめ

ここまでの考察により、『メノン』におけるメノンと『ゴルギアス』におけるカリクレスの、それぞれの対話篇における冒頭の発言の相違が、それぞれの対話篇の主題あるいは展開を暗示するものであることが検討された。そして、両対話篇の冒頭の箇所は、師ソクラテスの探求の方法をなぞりつつも悩み続けていた頃の若きプラトンの心のかき乱しの軌跡の最後の部分であり、プラトンが独自の哲学を述べ始めようとするその開始点であるとすることも可能であるかもしれないことが示された。本論考における考察を端緒として、それぞれの対話篇（特に『ゴルギアス』）に関するより深い考察、あるいは両対話篇についてのさらなる関連の検討と、ここでの考察をより精緻なものにすること、さらには、両対話篇の初期対話篇そして中期対話篇や後期対話篇における探求の方法との関係の綿密な検討が、今後の課題といえるだろう。

¹⁵ Vlastos, pp. 44-45

参考文献

- R. S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1961
- Myles F. Burnyeat, First Words, *Proceedings of the Cambridge Philosophical Society*, 43, 1997, pp.1-20
- J. M. Cooper (ed), *Plato Complete Works*, Hackett, 1997
- Jacob Klein, *Plato's Meno*, Chicago, 1965
- Dominic Scott, *Plato's Meno*, Cambridge, 2006
- R. W. Sharples, *Plato Meno*, Alis & Phillips, 1985
- Gregory Vlastos, The Socratic Elenchus, *Socrates Critical Assessment*, Routledge, 1991, pp.28-59
- 加来彰俊 (訳) 『ゴルギアス』、『プラトン全集』第9巻、岩波書店、1974年
- 松井貴英 (a) 「メノンは賢いか否か」 *Nagoya Journal of Philosophy*, No. 4, 2005年、1-16頁
- 松井貴英 (b) 『プラトン知識論の研究——『メノン』の想起説に関する考察』博士論文、2005年度
- 松井貴英 「メノンの最初の問い」『教養研究』第19巻第2号、23-37頁、2012年